

投与し、成体期でその存在を調べた。その結果、顆粒細胞層下帯に存在する神経幹細胞にBrdUの存在を確認できた。BrdUは分裂により希釈されるため、分裂を数回行うと検出できなくなる。従ってこの結果は脳新皮質に存在する神経幹細胞とは異なり、胎生期海馬神経幹細胞の中には分裂をほとんど行わずに成体まで維持される細胞がいることを示している。BMPはGFAPを発現する神経幹細胞に作用しているため、海馬に豊富に含まれるBMPが細胞増殖を低下させることで海馬神経幹細胞の未分化性の長期間にわたる維持に関与していることが示唆された。

#### P1-19. 認知症患者における総合機能評価

(社会人大学院2年高齢総合医学)

○波岡那由太

(高齢総合医学)

深澤 雷太、金高 秀和、山川 仁子  
久米 一誠、羽生 春夫

【目的】我々はCGAスクリーニングテストとしての「Dr. SUPERMAN」を開発し、高齢者の総合的機能評価に有用であることを報告してきた。今回、物忘れ外来と一般外来を受診した患者群で障害の程度を比較し、次いで認知症の診断がなされた患者について本法を用いて、認知症の各病型による相違を比較したので報告する。

【方法】当科一般外来および物忘れ外来通院中の223例の老年患者を対象とし、Dr. SUPERMANを用いて各群を評価した。各項目について障害なし(0)、障害疑い(1)、障害あり(2)に分けてスコア化した。認知機能障害の疑い、ありの患者については、診察、神経心理検査、画像検査などを加えて認知症の病型診断を行った。

【結果】認知症群と非認知症群について各項目を比較すると、前者で言語理解、服薬管理、認知機能障害が高率にみられた。次いで、外来で認知症と診断された147例における各項目の総スコア数は、年齢と正の相関が、性別・MMSEと負の相関がみられ、さらにアルツハイマー病(AD群)と非アルツハイマー病(NAD群)(レビー小体型と血管性認知症)で比較すると、NAD群で有意に高くなった。さら

に重回帰分析の結果、NAD群で高齢、男性、MMSEスコアの低値に伴い種々の機能障害が高頻度となった。

【考察】年齢や認知症の重症度に加えて、認知症の病型も種々の機能障害に関与する要因であることから、高齢認知症患者の治療やケアにおいては、患者背景や原因疾患を考慮した対応が必要である。

#### P1-20. 急性期脳循環評価を行った低酸素性虚血性脳症を認めた新生児仮死2例

(小児科学)

○廣瀬あかね、高見 剛、奈良昇乃助  
石井 宏樹、赤松 信子、菅波 佑介  
近藤 敦、春原 大介、河島 尚志

【はじめに】近年、近赤外線分光法で計測される脳内Hb酸素飽和度(SO<sub>2</sub>)が、新生児仮死予後不良例で生後24時間後から有意に上昇し、この変化が遅発性エネルギー障害における脳酸素消費の減少を示すと報告された。また、新生仔豚を用いた新生児仮死モデル作成時に、近赤外線時間分解分光法(NIR-TRS法)で計測した脳血液量(CBV)が脳循環の変化を鋭敏に反映し、予後のコントロールに有用であることが示された。今回、aEEGとSO<sub>2</sub>、CBVの計測が同時に行えた低酸素性虚血性脳症(HIE)の2例を報告し、NIR-TRS法の有用性を検討する。

【症例1】在胎38週、2,928g。Aps 2(1)/4(5)/4(10)。他院で出生後、当院搬送となった。入院時aEEGはdiscontinuous background(DC)であった。PB投与後、フェンタニルで鎮静し、低体温療法を3日間施行した。頭部MRIにて脳幹・視床・基底核・海馬の広範囲に高信号領域を認めHIEと診断。SO<sub>2</sub>(%)は生後6時間で63.9(基準値70.0±5.0)と低値を示し、生後12時間81.7(70.7±3.7)、24時間85.2(71.2±3.6)と急激に上昇した。CBV(ml/100g)は生後6時間2.22(基準値2.08±0.5)、12時間3.07(1.97±0.4)、48時間3.87(2.1±0.3)と上昇した。

【症例2】在胎40週、3,394g。Aps 1(1)/3(5)/4(10)。他院で出生後、当院搬送となった。入院時aEEGはDCであった。PB投与後、フェンタニルで鎮静し、低体温療法を3日間施行した。頭部MRIにて視床・